

[成果情報名] 低樹高化が期待できるカキわい性台木‘静カ台1号’及び‘静カ台2号’

[要 約] わい性台木‘静カ台1号’及び‘静カ台2号’を‘前川次郎’で利用することで、樹高を低く抑えることができ、植付け4年目からの早期収量が優れた。

[キーワード] わい性台木、低樹高、省力化、早期成園化

[担 当] 静岡農林技研・果樹研セ・落葉果樹科

[連絡先] 電話 053-428-3141、電子メール kajyu-rakuyo@pref.shizuoka.lg.jp

[区分] 果樹

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

カキは、果樹の中でも樹高が高くなる樹種である。このため、カキの省力生産の推進のためには、低樹高栽培が必要とされる。そこで、わい性で作業性に優れる台木品種の育成を試みた。

[成果の内容・特徴]

- 1 1989年に、静岡県農林技術研究所果樹研究センター内の‘前川次郎’ほ場において、樹がコンパクトで収量性に優れると考えられる個体を選抜し、その台木を茎頂培養により増殖・育成した。育成した台木を用い、1997年に‘前川次郎’を接ぎ木し、1998年には場に定植した。その後、生育、収量、品質を10年間調査し、優良なわい性台木系統として‘静カ台1号’及び‘静カ台2号’を選抜した。
- 2 樹高は、ヤマガキ台と比較して、11年生で‘静カ台1号’では78%に、‘静カ台2号’では67%に抑えられる。また、樹容積は‘静カ台1号’では83%、‘静カ台2号’では40%に抑えられる(図1、表1)。
- 3 収量は、ヤマガキ台と比較して、5年生～11年生までの累積収量が‘静カ台1号’では221%、‘静カ台2号’では161%であり、いずれも早期の収量が多い(表2)。
- 4 果実品質は、‘静カ台1号’ではヤマガキ台と比較して果実重が大きくなった。糖度、果皮色については、台木による違いは見られない(表3)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 両台木は2014年3月6日付けで種苗登録された。現在、普及に向けて台木の増殖方法や供給体制を検討中である。

[具体的データ]



図1 わい性台木を利用した14年生‘前川次郎’の生育状況

表1 台木系統が‘前川次郎’の樹体生育に及ぼす影響^z

台木系統	樹高 (cm)	樹幅 (cm)	樹容積 (m ³)
静カ台1号	257(78) ^y b ^x	285(101) a	15.2 (83) a
静カ台2号	221(67) b	216(77) b	7.3 (40) b
ヤマガキ台木	328(100) a	281(100) ab	18.4 (100) a

^z 11年生時

^y 市販台木を100とした場合の比率

^x 同一符号間にはtukeyの多重検定(5%)で有意差なし

表2 台木系統が‘前川次郎’の樹あたり収量に及ぼす影響

台木系統	累積収量 ^z (kg)	幹断面積 ^y (cm ²)	累積収量/幹断面積 (kg/cm ²)
静カ台1号	70.3 (221) ^x a ^w	79.8 (71) b	0.92 (221) b
静カ台2号	51.1 (161) b	41.8 (37) c	1.23 (317) a
ヤマガキ台木	31.8 (100) c	112.6 (100) a	0.29 (100) c

^z 5年生～11年生までを樹別に累積

^y 2007年11月に11年生樹を調査

^x 市販台木を100とした場合の比率

^w 同一符号間にはtukeyの多重検定(5%)で有意差なし

表3 台木系統が‘前川次郎’の果実品質に及ぼす影響^z

台木系統	果実重 (g)	糖度 (Brix)	果皮色 ^y
静カ台1号	291 a ^x	17.5 a	51.8 a
静カ台2号	274 b	17.5 a	54.2 a
ヤマガキ台木	277 b	17.7 a	52.4 a

^z 8年生～11年生までの平均値

^y 色相角度 = ((ATAN(b*/a*)/2π) × 360° 0° =赤紫、90° =黄色 180° =青紫 270° =青

^x 同一符号間にはtukeyの多重検定(5%)で有意差なし

[その他]

研究課題名：優良台木を利用した効率的生産システムの開発

予算区分：県単

研究期間：2011～2014年度

研究担当者：鎌田憲昭、磯部卓文、安間貞夫、加々美裕、荒木勇二、種石始弘、服部憲明